



図書館だより

2022.11
No. 38

長崎県立大学佐世保校附属図書館

〒858-8580 佐世保市川下町123
TEL 0956-47-2191 (代表)
<http://sun.ac.jp/center/lib/sasebo/>

「学生からの学び」

岩重聡美

(副学長)

ここ数年来、ゼミ生はもちろん多くの学生との共同プロジェクト(以下PJ)にかかわることが増えてきた。厳密にいうと、増えてきたのではなく、自分から好んで学生との共同PJに参加、その経験を通じ学生との貴重な時間を過ごすことの有意義さを実感、何よりその時間と空間を楽しんでいる自分がよくわかる。



教員なりたての頃は、「わたしは、先生。あなた方は学生。だから私はあなた方に多くを教え、そして学生は、多くを学ぶ」と思い込んでいた。しかし、時間の流れと共にその考え方は大きく変わった。

「教員は学生から多くを学ぶ。学生に教えることを通じ、自分も多くのことを学ぶ」

学生との共同PJ研究を進めるに際し、学生と教員とでチームを組む。もちろんそのチームではリーダーを決め、そのリーダーシップのもと、多くの研究や作業が進められる。その時のリーダーにより、その進捗状況や成果は大きく異なる。それは、まさにリーダーが発揮するリーダーシップによるものである。わたくしが参画した学生との共同PJでは、通常、学生がリーダーになる。さあ、学生は大変。リーダー役の学生は、この研究で何を

どう進めるのか、誰にどのような指示を出し、どのような手筈を整え最後まで到達させるのか。チームが順風満帆にそして仲良く作業に取り組んでいれば問題は何もない。しかし、そううまく事は運ばない。多くの困難や乗り越えるべき壁、障害がたんまりと山積み。仲間割れも普通に起こる。ここで重要なことが、まさに「リーダーシップ」である。このリーダーシップとは、その学生の資質によるものが大きいように感じるが、訓練によってその完成度は高まる。

リーダーシップについては様々な考え方があるが、「リーダーシップ」[アメリカ海軍士官候補生読本]の中では、「1人の人間がほかの人間の心からの服従、信頼、尊敬、忠実な協力を得るようなやり方で、人間の思考、計画、行為を指揮できかつそのような特権を持つようである技術(アート)、科学(サイエンス)、ないし天分」と定義されている。リーダーが一方的にメンバーへ責任を課すのではなく、リーダーとメンバーの両者間で互いに責任を持ち合うことなどが重要であると記されている。

そして、リーダーに求められるべき力の第1は、「勉強・自信・尊敬・信頼」。リーダーは、自分がまず先に勉強し、メンバーに具体的な手本を示す。そして、次に「全員で協力しながら進める環境づくり」に努める。リーダーに求められるべき力として基本的かつ重要な要素として「人間性」も挙げられる。人が見ているように見えていまいが、常に正直であり、正々堂々として誠実である人。人間関係やビジネス、政治や経済においてもこのしっかりとした人間性が備わっていることは人間として最も重要であり、基本中の基本。これが人間としての根っこにしっかりと根

付いていること。この人間性は、リーダーとして求められるべき力「資質」として忘れてはならない点だと、学生との交流を通じ確信し、自分を振り返る。

駆け出し教員から数十年がたち、数えきれないほどの学生を社会へ送り出した。この経験の中で、学生から多くのことを学んだ。わ

たくしには、いくつかの学びの方法がある。本を読むことを通しての学び、諸先輩方からの学び、そして、学生からの学びである。これらの学びは、まさにわたくしの貴重な財産である。おごらず高ぶらず謙虚にそしていつも感謝の気持ちを持ちながら、教員として残された時間を学生と共に歩んでいきたい。

図書館を描く 2冊の翻訳小説

後藤正之

(附属図書館長)

今回は、2022年に刊行された2冊の翻訳小説をご紹介します。2冊とも主人公が若い女性で、図書館が主要な舞台となっています。

一冊目は、マット・ヘイグ著『ミッドナイト・ライブラリー』（ハーバーコリンズ・ジャパン）です。こちらはファンタジー小説で、主人公が「生きていたかもしれない別々の人生」を綴った無数の本が並んでいる図書館、「真夜中の図書館」が舞台です。

イギリスの地方都市に住む主人公ノーラは35歳の女性で、これまでの人生は不幸の連続でした。そこにペットの事故死や失業等が重なったことから人生に失望し、自殺を図ります。しかしその後、幻想的な図書館の中にいる自分に気づきます。その図書館の司書さんは、高校時代に自分に優しく接してくれた司書さんのエルム夫人でした。エルム夫人は、これらの本は、ノーラがあの特典で異なる決断をしていたときの、その後のノーラの人生が綴られていることを、そしてその本に描かれた生活が本当に気に入ったならば、その人生へと同化できることを伝えます。あの時の恋人と別れずに結婚していたら…、水泳のオリンピック選手になる夢を諦めないでいたら…、所属していたロックバンドを脱退していなかったら…、友人の誘いに応じて一緒に外国に移住していたら…、と、ノーラはあり得た



はずの人生を無数に経験していきます。(ちなみにある登場人物からは、「シュレーディンガーの猫」が言及されています。)

やがて真夜中の図書館が崩壊し、最後に一冊だけ本を選ばなければならなくなった際、彼女は、決然とある本を選びます。

この小説に出てくるような不思議な体験が出来る図書館は、もちろん(多分?)実在しません。しかしそれでも、現実の図書館で蔵書に接することで、自分がこれまで知らなかった多様な世界に触れることはできます。その体験を通じて、自分のこれから進む道の選択肢が広がり、より生きがいのある生活が実現するかもしれません。皆さんがそうした体験をしてみたいと思ったのならば、どうか現実の図書館に足を運んでみてください。

さて二冊目は、J.S.チャールズ著『あの図書館の彼女たち』（東京創元社）です。こちらは、実話をベースとした小説で、主人公であるフランス人女性オディールの、第二次世界大戦期のパリと、1980年代央のアメリカ地方都市での生活が交互に描かれます。本好きの若いオディールは戦争直前に、パリにあるアメリカ図書館(実在の図書館で、アメリカが自

国の情報発信のために 1920 年に設立) に司書として採用されます。パリはもともと国際都市ですが、アメリカ図書館は英米の新聞・雑誌や書籍が豊富にあることから、パリ住民のみならず多くの外国人に利用されていました。またスタッフもアメリカ人やフランス人のみならず、様々な国籍の人たちが働き、利用者とも仲良くしていました。しかし戦争が始まりパリにドイツ軍が進駐したことで、外国籍のスタッフは母国への帰国を余儀なくされたり、収容所に抑留されたりしてしまいます。特にユダヤ人は、図書館への入館を禁止されたところか、安全な外出もままならない状況に追い込まれます。そうした中で、オディールたち図書館員は、捕虜になった兵士達のために収容所に数多くの本を送付するとともに、身の危険も顧みず図書館の運営を続け、ドイツ軍に隠れてユダヤ人の自宅まで貸し出す本を届けることを続けていました。しかし戦争が激化する中で、オディールは最大の理解者である双子の弟を失うなど苦難の日々が続き、その後戦争花嫁としてアメリカに渡ります。夫と一人息子を失った後は、生活習慣の違いもあり周りの住民とは疎遠で

孤独な生活を送ってきたオディールですが、隣家の少女リリーとの出会いをきっかけに、リリーの生長を助け、やがては心に突き刺さっていた戦争中のある出来事に自ら向かい合うこととなります。

戦争中、なぜ慰問物資としてワインではなく本を送るのかを聞かれたオディールは、「(前略) なぜ本なのでしょう。それは、他者の立場から物事を見せるような不思議なことのできるものは、ほかにないからです。図書館は本によって、ちがった文化同士をつなぎます。」と答えています。戦争が歴史上の出来事から現実の存在へと変化し、国家間・宗教間・民族間での憎悪が顕在化している現在において、本書の読者はこの発言の意味とその背後にある希望に、より一層強く胸を打たれると思います。

翻訳小説の例に漏れず、この二冊とも分厚い本で、導入部はややまどろっこしい感がありますが、読み続けるとすんなり作中世界に入り込め、思わず時間を忘れます。秋の夜長、たまにはスマホを脇に置いて、ゆっくり読書をしたかったときには、是非手に取ってみてください。

人生はいつも 気持ち次第

金 志 善

(経営学科 准教授)

出典名：ザ・シークレット (The Secret)

著者名：ロンダ・バーン

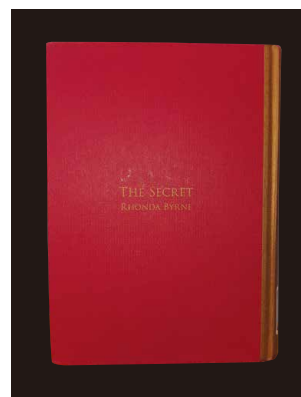
出版年月：2007年10月

もし、私が大学生の時にこの本に出会っていたら私の人生は変わっていたのではないだろうか…。読んだ後、そう思わずにはいられなかった。

私がこの本に出会ったのは社会人になってからだった。社会人になりそれなりに忙しい毎日を過ごしていたが、就職活動中に自分に

自信が持てなく、第一志望だった職種を諦めていた。別の仕事に就職してからもそのことがずっと引っかかって、今思い返せば、長い間、頭にチラつかせながら仕事をしていたと

思う。本当に自分がなりたい自分像になれるのか、なりたかった職業についているのか、自答自問する日々が続いていた。そのため、この本を読み終えた後、こんなことが本当にあるのか? と不思議に思ったと同時にこの法則を理解し、自分のものにしていれば夢



は叶ったのかもしれない…と。

この本の「偉大なる秘密」はとても多くの偉人たちが知っており、その事実には驚いた。例えばシェイクスピア、ニュートン、ベートーベン、エディソン、アインシュタインなど、世界的に名の知れた歴史上の人物がこの秘密を手にして実行していたらしい。その秘密とは…引き寄せの法則だ。

「あなたの頭の中の思考が現実化したもの、それがあなたの人生です」

簡単に言うと、良いことを考えれば良いことが起き、悪いことを考えれば悪いことが起きる。シンプルなことだが、人は不安になると悪いことを考えてしまう時もある。だが、それはしてはいけならしい。反対に気分がいい時は良いことしか頭に浮かばないし、世の中がバラ色に見えたりすることもある。この秘密の本は、自分がハッピーな気分になることだけを考えて過ごせば、宇宙にいいことが伝わり、楽しいことハッピーなことが引き寄せられてやってくる、というのだ。

引き寄せの法則でわかりやすいのは「類は友を呼ぶ」の法則ではないだろうか。自分の周りにいる友達は自分と似たような性格、似たような雰囲気ではないだろうか。また、こうなったらいいな…と漠然と考えていたことが現実になったり、ほしいな…と思っていたものが手に入ったり、誰しも経験があるのではないだろうか。

もし、この本を大学生の時に読むことができていたら…この法則を知っていたら、もっと前向きに積極的に就職活動をしていたかもしれない。自分のなりたい理想像を考え、合格をもらうためには何が必要か、自分には何が足りないのか、前向きに考えられたのでは

ないかと思う。

結局、一度もトライしなかった職種に後悔しないために既卒で挑戦しようと決めた。長い間、社会人を経験していたからか、落ち着いて準備ができたと思う。この「秘密の本」を読み、イメージを膨らませ、友達にも相談したり、落ちるかもしれないという不安と闘いながら、準備をした。結果は最終試験の一手手前、三次試験で落ちてしまった…。とてもショックだったが、その時に感じたのは当然だ…と。私は三次試験の準備期間、合格通知を手にするイメージ、そこで働くイメージができていなかった…。しかも三次試験まで来ることができたが、落ちるかもしれないという不安の方が勝っていた。結果は残念なものだったが、どこかに安堵している自分もいた。私はここまでなのだ、と。私のイメージの足りなさ、自信のなさ、受かるかもしれないより落ちるかもしれないという気持ちが大きいことが招いた結果だろうと感じた。良くも悪くも自分の思考が現実を引き寄せた結果だった。

この「秘密の本」には数々の良いことを引き寄せたエピソードが載っている。信じられないものもあるが、事実だ。お金、人間関係、健康など誰にでも人生において上手くやっていきたいと思うものばかりである。もちろん、願うばかりでなく、本人の努力も必要だが、ある意味、人生攻略本ではないかと思う。小さいことから始めると自信につながるので、現在も日常生活に取り入れて、小さなハッピーをちょこちょこ積み重ねている。

学生の皆さんにも興味があれば是非読んでもらいたい一冊だ。

データとの向き合い方

森内 泰

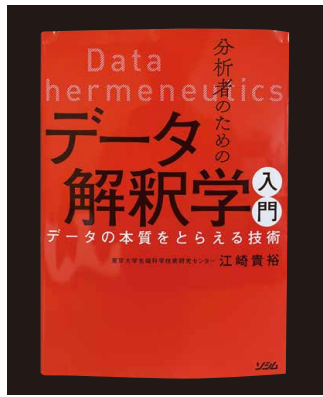
(国際経営学科講師)

出典名：分析者のためのデータ解釈学入門
データの本質をとらえる技術

著者名：江崎貴裕 ソシム株式会社

出版年月：2020年12月25日 初版第1刷発行
私たちの周りには偏差値や政党の支持率、

投票率、2020年以降日々発表される新型コロナウイルス感染症の感染者数、レストラン検索サイトの点数など様々な数字やデータにあふれ、その数字たちに



翻弄されています。皆さんが大学を卒業され社会人になると売上高や利益率に一喜一憂し、場合によってはアンケート調査の担当になる等、よりデータと向き合う日が来るかもしれません。ビジネス界隈でよく耳にする「AI」、「機械学習」は、データを元に統計学を活用した分析・予測手法で、今後社会に出る皆さんは接する機会が増えるでしょう。これらの数字やデータと向き合うためには、統計の知識が不可欠です。佐世保校の学生は文系寄りの方が多いと思われるので、統計や数字、数学に苦手意識を持つ方もいらっしゃるのではないのでしょうか。偉そうに言っている私は、小学生3年生の算数で30点台を叩き出してからド文系の道を学部生まで進んできました。しかし省庁や会社勤めの時にはデータを扱う必要があり、大学院では統計分析の世界でもがき苦しんできました。参考になりそうな本を手にとっても、難しい数式が並んでいて身体が拒否反応を起こし、理解するのに随分と時間がかかりました。最近手に取った「分析者のためのデータ解釈学入門 データの本質をとらえる技術」はド文系の私でもわかりやすく、統計のポイントをとらえています。学生時代に出会っていればどれだけ助かったかと思う書籍なので、紹介します。

この書籍では、データとは何か、統計学の基本、取得できるデータのバイアス・偏り、データの取得方法、分析の方法（相関、多変量解析、数理モデリング）、データ分析・解釈・活用の畧と、初めてデータ分析に触れる人に

とって必須の考え方が網羅的に掲載されています。図表や文字での説明を基本としていて、文系の方にとって分かりやすい構成になっています。データ分析というと、膨大なデータがあれば分析ができるだろうと考えがちです。しかし本書では、データの質が悪ければ出てきた結果も役に立たないことが冒頭で明示されており、取得したデータをどのように事前に処理するべきかの考え方が記載されています。そのうえで、仮説とデータの関係性、取得したデータから考えられる分析手法の提案まであり、統計分析に必要な基礎知識が全て詰まっています。

みなさんが卒業論文を書くために先行研究をレビューする中で、最初に出くわす壁が統計分析結果の読み方です。この書籍さえあれば、分析結果が何を示しているのか容易に判断できるようになります。またデータ取得から分析の流れが明確に記載されているので、卒業論文でアンケート調査の結果分析をする際にも平均値や、最小値最大値等のデータ特性を把握記述統計量のみならず、一歩進んだ統計分析、その解釈までチャレンジすることが出来るようになります。データ分析の流れを理解した上で、エクセルやR、Python、Stataなどの分析プログラムを使った統計分析を行うとその理解度も解釈の内容も深みが増してくるでしょう。

データは嘘をつきませんが、嘘つきはデータを使います。学部生のうちにデータの扱い方や分析方法に慣れれば、社会に出た後にもより深い洞察、物事の本質に近づくことができるようになり、データに騙されなくてすむようになります。データ分析まで行わずとも、報道や社会で見聞きするデータの誤った解釈に流されず、正しい判断を行う素地を体得できます。大学生のうちにデータ分析に慣れ親しんでおいて絶対に損はありません。是非手に取って学ぶとともに、何かのデータに出会ったときに参考書として見返してほしい一冊です。

フィールドに身を置く

前田 竜 孝

(公共政策学科講師)

わたしは、地理学の立場から自然と人間の関係について研究しています。具体的には、現場での行動観察を通して、いかなる要素が関係しあいながら漁業者の活動が形成されているのかを考えています。

漁業者は、無数の要素から影響を受けて活動します。それは気象状況、潮汐、潮流、風力、風向といった自然的な要素だけではありません。漁船の能力、漁業規則、セリの時間なども影響します。もちろん、漁獲対象となる生物の生態は活動を決定づける重要な要素です。その都度、漁業者とこれらの要素とのあいだに関係性がつくられ、ときに崩れたり乱れたりしながら、漁業者は能動的かつ受動的に活動します。

生態人類学から影響を受けた 1980 年代以降の漁業の地理学的研究は、丹念なフィールドワークに基づいて、自然環境と漁業活動との関係性を明らかにしてきました。田和正孝『漁場利用の生態』(1997年、九州大学出版会)はその到達点といえます。そこには漁業者が自然に関する知識を駆使しながら、合理的に活動する様子が描かれています。大学院生時代、わたしはこの本を読みながら、彼らが自然と対峙する姿に思いを馳せていました。

2014年夏、大阪府の泉佐野漁協の底曳網を営む漁業者に協力をあおぎ、初めて乗船調査の機会を得ました。早起きと船が苦手なわたしは押し寄せる睡魔と船酔いに苦しみながら、何度も「なぜ、この漁場を選んだのか」、「どの魚種を狙っているのか」と漁業者に尋ねました。泉州弁で返ってきた回答は、「適当や」や「何が獲れるかわからん」といったものでした。自然についての豊かな知識に基づいて緻密かつ合理的に漁場を選択している漁業者像を思い浮かべていたわたしにとって、

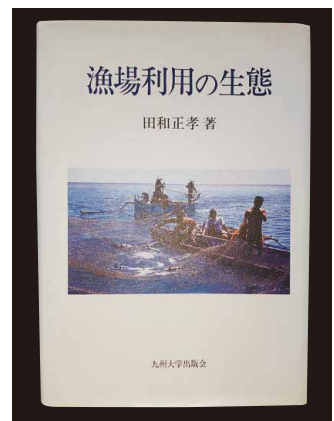
この答えは納得できませんでした。フィールドワークは失敗したと感じました。このフィールドは自分には合わないとも感じました。

しかし、各地で調査を重ねる

うちに、こうした漁業者の姿勢は当然であることがわかりました。漁業には、養殖業のように単一の魚種のみを生産するものがあります。一方で、カゴや刺網、定置網、底曳網などほとんどの漁業種類では、慣れた漁場で網を曳いたり、漁具を仕掛けたりして、かかってきた生物を船上に揚げます。何が獲れるかという確信よりも、この時期・季節はこの魚が獲れるだろうといった経験則に基づいて活動します。当然、狙っていない魚や売れない魚も獲れます。

重要なのは、こうした場合、単一の魚種に狙いを定めていては、雑多な魚が獲れる状況に対応できないということです。予想外の魚が獲れてしまったら、水揚げ後の魚の処理と売り先の探索に対応できません。ここにおいて、漁業には事後的に「獲れた魚に価値を見出す」という作業が求められます。

漁業者や魚商人は、何も考えずに水揚げを待つわけではありません。何が獲れてもよいようにつねに準備する必要があります。この「準備しながら待つ」姿勢が必須となります。諸要素の関係性という観点から考えると、どの関係性に漁業者が巻き込まれても、ある程度対応できるような柔軟性が求められるといえます。本で知識を得て、わたしが勝手に想像(創造)した「自身の活動を合理的かつ緻密に説明できる漁業者」は、実際の現場では通用しません。フィールドに赴き、思い描いていた漁業者像を崩された貴重な経験でした。



本を読んでいなければこうした失敗も得られなかったのだと感じます。

わたしたちは、普段、陸で生活をしています。そこでは、陸中心の思考になっているのかもしれませんが。海ではたらき、自然と対峙する人びとのくらしを知ることで、自身の生き方を顧みることができるかもしれません。わたしは、フィールドワークとは他者を見たり、彼らからはなしを聴いたりして、自己を

振り返る行為だと考えています。本を片手にフィールドに行き、誰かの話を聴き、疲れたら休み、たまに本を読み、自身の過去や未来に関してとりとめのない思考に浸る。かけがえのない時間だと思います。

とりあえず、本を片手にフィールドに出かけてください。そして、みなさんが学内でわたしを見かけたら、そこで得た豊かな経験を聴かせてください。



『読書のススメ』

真田 高 充

(実践経済学科教授)

学生の「活字離れ」はまだ続いているのでしょうか。最近では電子書籍の普及やコロナ禍での巣籠もり需要を背景に「月に1冊以上本を読む」人の割合が少しずつ増えているようです。

そこで今回は学生にとっての「読書の価値」について改めて考えてみたいと思います。

まず、本に興味がない学生は、読書に対してこんな先入観があるのではないのでしょうか。「本は何冊も読まなければならない」「難しい(まじめな)本を読まなければならない」「丁寧に読む必要がある(時間がかかってしまう)」「1冊を最後まで読み切らないといけない」「本を買うのがもったいない」「どんな本を読んだらいいかわからない」... など、こんなところでしょうか。

ただ、少し意識が高すぎるような気がします。

もちろん我々教員にも(活字離れの)責任の一端があると思います。授業でも読書の面白さを伝えきれていませんし、これから生きていくうえで読書は必須のスキルだと思ってもらえるような人材を育てていないように思います。

では改めて「読書の価値は何か?」... 私なりの考えを紹介したいと思います。

私自身、以前は良くこんなことを言われていたような記憶があります。

「先人が苦勞して(あるいは一生をかけて)導き出した知識(経験値)を読書の分だけ追体験(疑似体験)できる。自身の生涯で経験できることは限られているが、読書をすれば自分と違う経験値や視座を持つことができる(人生を何度も経験するのと同じような効果が期待できるということですね...少し大袈裟でしょうか...)」。

しかし、今や時代は変わりました。読書だけが知識を吸収できる手段(ツール)ではないからです。情報収集や知識の習得なら「ネット記事」や「動画」など、他のコンテンツを使った方が図解や映像などの情報量が多く、わかりやすく効率的(楽)です。これらのコンテンツと比べると、読書はローテクで見劣りします(タイパ**が悪い→**タイムパフォーマンス)。

それでも、なぜ読書する必要があるのでしょうか?

それは、読書にしかない固有の価値があるからです。読書は「『思考を巡らす』」ことができる数少ない手段(ツール)なのです。なんだか分かったような分からないような表現ですが、『思考を巡らす』とはこういうこと(以下)だと思います。

「動画」であれば、言葉は(文字ではなく)「音」として処理されます。ですから、見ている間に色々と考えてしまうと聞き逃してしまい内容が理解できません。「考える暇」を

与えてくれないのです。何も考えず「受け身(感覚的)」になる方が良いのです。

一方、「読書」はどうでしょうか。ネット記事のように短い文章はさておき、内容を理解するためには頭の中をフル回転させなければなりません。動画に比べて(単位時間当たりの)情報量が少ない分、自らの「想像力(Creative)」を掻き立てて自身の世界観をつくり込みながら読む必要があります。また、前の文章に遡って要旨を確認したり(「論理的思考(Logical thinking)」)、さらには、「これって本当に正しいの?」と内容を疑いながら読み進める必要も出てきます(「批判的思考(Critical thinking)」)。

このように、動画に比べると負荷はかかりますが、これが「思考を巡らす」ことであり、他のコンテンツにはない読書固有の価値なのです。

「本は汚して読むものだ!」と読書の心得を学生時代に教わりました。気づいたことや疑問点は余白に漏らさず書き込み、文章には線を引いて付箋を貼りながら何度も読み返す。そうすれば本に対する愛着も出てきます。

さらに読書はアウトプットにも効果を発揮します。文章を読んで要約したり、自分の言葉で考えをまとめたり、学生時代のレポート作成や卒業論文の執筆に限らず、プレゼン資料の作成など社会人に求められる必須のスキルでもあります。しかしアウトプットのスキルは簡単には身に付きません。推敲して、推敲して…時にはもがきながら(笑)…その繰り返しです。アウトプットもまた「思考を巡らす」行為そのものです。ですから、是非と

も早い段階から読書の習慣を身につけ「思考を巡らす」訓練を始めて欲しいと思います。

県大図書館には専門図書だけでなく雑誌や動画など幅広いコンテンツが揃っています。どの本を手にとっても、途中で読むのを止めてしまっても構いません。図書館で気に入った本を見つけてから購入しても良いと思います。まずは本を身近に感じるところから始めてください。

この記事を引きかけにして、一人でも多くの学生が読書の価値を再認識し、本に触れ「ネット記事」や「動画」と同じように情報収集や知識習得のラインナップの一つとして本を使いこなし、読書のスキルを磨いて欲しいと願っています。

最後に、読書に興味を持ってもらうための1冊を紹介します。

出典名:『読書の全技術』

著者名:齋藤 孝

出版年月:KADOKAWA、2014年



◆附属図書館HPアドレス <http://sun.ac.jp/center/lib/sasebo/>

- 当館は本学学生以外の方でも県内にお住まいの15歳以上の方は利用できます。
- 開館時間/平 日:午前8時30分~午後10時まで(学生の休業期間中は午前9時~午後5時まで)
土曜日:午前9時~午後5時まで 休館日:日曜日・祝日・大学閉校日など

現在、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、学外者の利用は控えさせていただくなど利用制限を行っています。

編集・発行責任/長崎県立大学佐世保校附属図書館運営委員会 発行日/2022年11月30日